黄塵（こうじん）の大地　石青（せきせい）の空

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黄塵（こうじん）の大地　石青（せきせい）の空

【Ｎコード】
Ｎ１４０８Ａ

【作者名】
維月十夜

【あらすじ】
遮るもののない、旱魃でひび割れた大地が広がる、数百年後の世界が舞台。人間に興味を持つ妖（あやかし）の少年が夢を抱いて荒野を渡る。その先にあるものとは…！？

プロローグ（前書き）

どうも、維月十夜です。
今回、新たに書いたのは今から数百年後の世界が舞台のラブファンタジーです。
もし、よろしければ謁見のほどを。
それでは、失礼致します。

プロローグ

遮るもののない、旱魃でひび割れた大地を、太陽が灼いている。
黄土色にひび割れた大地を、止めどなく風が削り、その形を砂に変えていった。

見わたす限りの黄塵の地が、ほぼ全域を占めるここは、国土の西にある甲国。
全般に、辺境といわれる区域だ。
この国の国土は硬く、甲羅のようにひび割れているので、そう名が付けられたという。
太古の人間がもし、今の国土を見たなら、必ずこう言うだろう。
『地球温暖化』と。
今は、その言葉すら忘れ去られて、消えた。
古来より長らえてきた人間の文明は、突然の終焉を迎えたのだった。
併発する激震と津波が、地球全体の国土を砕けさせた。
山脈は崩れ、海が沸き…。
世界は、大いなる犠牲を礎として、新たな変革を迎えようとしていた。

その後、生き残った僅かな人間たちは、ある者は深山の奥へ。
谷底に小国を造る者や。
また、ある者の集団は、土地から土地へ渡り歩く、遊牧の民となった。
名を失った国土に、そうした者たちの子孫が散らばるようになり、
再びそれぞれの国土に、名を付けた。
今となっては太古、人間たちと、共にあった動物は、ある種類を除いて他は滅びてしまった。
物資を断たれた人間たちは、困惑の末に、一つの方法を見つけた。

人間が闊歩(かっぽ)していた時代には、決して姿を見せなかった者。
昔の人間が、恐れ・畏怖していた妖魔・妖(あやかし)という存在だった。
人々は、いくつもの困難にもめげずに、妖を狩り、増やし・慣らすことに成功した。

しかし、その例外もないわけではない。
妖魔や妖の大半は、人間を喰らう。
決して、慣らすことのできない者がいるのも、事実だった。
それが、この世界の始まりである。

人知の及ばない、妖の暮らしも、実は、ほぼ遊牧の民と同じで…。
この世界の人間と妖魔・妖の人口（？）は妖魔の方が多く、人間の方が稀少なのだ。
現在は、妖が人間を襲うことは滅多にない。
むしろ、友好的に興味を持って、婚姻を結びたがる者の、数の方が多いのである。
それが成功したのは、本当に稀な場合だったが。

逃亡少女・ダルテ（前書き）

殺伐とした大地を、妖の少年・昴（すばる）が人間との共存を夢見て渡る！
ある日、昴は崖下に人間の少女を見つけて…？
異界を舞台に繰り広げられるラブロマンス

逃亡少女・ダルテ

いくら時が過ぎて、時代が移ろっても変わらないものがある。
季節の名だ。
今は五月。
本当ならば、すでに花咲く景色になるのが普通なのに。
一本の草も育たない甲国なら話は分かる。
しかし、ここは国土の南・崔国。
どこよりも、早く春を迎える国だ。
五月だというのに、長雨のせいでいくらも暖かくならない。
崔国でも、西寄りの白圭という場所から、物語は始まった。

「あーあ、つまんねえ。なーんでみんな反対するんだかなぁ」
雨の中、まわりで一番大きな、木の枝の上に座る少年が一人。
頬杖をついて、溜息をつく彼の名前を昴という。
雨が降っていても、人間と違って、彼ら妖は雨宿りをしない。
昴は首筋に、ぺったりと張りついた銀髪を掻き上げて、気持ちよさそうに伸びをした。
雨に憂鬱になる人間に比べて、妖は雨が降ると、かえって元気になるのだ。
群れの中でも、一番末子の昴は、今年で３００才になる。
３００才で大人として認められ、自由が与えられるのだ。
元もと、人間に興味があったのもあり、昴は、人間の中に混じろうと考えていたのだが、それを群の者に話した結果、こってりと説教をくらう嵌めになってしまった。
「久々に顔出したってのに、小言だなんてヒデェよな…たく、せっかくの雨なのに…帰って寝よ」
大木の幹から飛び降りて、すとん、と身軽に着地する昴。
昴の一族は、孟極という豹の姿をした妖怪だが、普段は人間に似せ

ているので、外見で妖とばれることはない。
急を要する事態を除いては、変形することは皆無に等しかった。

小雨の中を歩きながら、昴は、無機質な真白い空を、見あげてそっと呟いた。
「ほんと、つまんねぇ」
昴の家は、山奥の拓けた土地に建っている。
尾根づたいに歩いていると、すぐ傍の、崖下に人影を見つけた。
「あれは…人間だな、他の奴らに襲われた形跡はねぇ。単に墜(お)ちたのか」
しかし解せない。
こんな場所にいるのもそうだが、何より格好が目立つ。
場違いなのだ。
少女が、着ている衣は泥に汚れていたが、決して、どこにでもあって、ありふれた物ではないことが、人間に関心を持つ昴だからこそ、分かったことだった。
「ま、どういう事かはさておき…ここは助けるべきだよな」

はち切れんばかりに、剥かれた双眸は天井を凝視する。
少女は、慌てて飛びおきた。
逃げなければ！
自分は追われているのだから…。
それにしても、ここはどこだろう？
崖から、足を滑らせたまでは覚えているが、そこから先が、すとんと抜け落ちている。
とりあえず、先を急がないと。
「いたい…」
起きようとして、ついた左手に激痛が走り、少女は小さく呻いた。
走り疲れ、所々すりむけた足は萎えて、使い物にならない。
衰弱しきっているのだ。

少女は、きつく唇をかみしめた。
早く逃げなければいけないのに、体がいうことを利かないなんて。
今、こうしている間にも、追っ手が探しているのに。
「目、覚めたみたいだな。大丈夫か？」
少女は、びくりと肩を揺らして、ベッドの中で後ずさった。
春の花のような、柔らかな目鼻立ちで、背中に流した、長い髪は淡い栗色。
ふっくらとした愛らしい、紅色の唇がわなわなと震えている。
「あ、あなた…誰なの？」
震えながら、やっと搾りだした彼女に、昴は首を傾げた。
その仕種は、たっぷりの愛嬌を含んでいる。
「俺は昴ってんだ、怪しいもんじゃねえよ。それより、大丈夫か？どこも、痛くないか？」
「…助けて、くれたのね？追っ手とか、じゃないわね？」
「それ、さっきも言ってた。うわ言で追っ手がどうとか…あんた、逃げてきたのか？」
「あ、あなたには…関係のない事よ」
ぷい、と顔を逸らした少女に溜息をついて、昴は、ベッドの傍にある椅子に座った。
「ふうん、まぁいいけどさ。名前、なんて言うんだ？」
「…ダルテよ」
少女・ダルテは、戸惑い気味に名を明かした。
上目づかいに見ているところからすると、まだ警戒は解かれていないらしい。
「ダルテ、か…珍しい名前だな。どこの出身だい？」
「青国（せい）、秧州（おうしゅう）の…玄椿宮（げんしゅん）。あら、驚かないの？」
「そりゃ、驚いてるさぁ…アンタ、王族なのか？深窓の姫さんが、どうしてあんな場所にいたのか」
昴は、茶色の瞳をしばたかせながら言った。
青国とは、国土の北西に位置する水源の豊かな土地だ。

別名『水の都』と言われる。
秧州は、その国の王族の住まう場所の名称である。
それぞれの国を治める王の中でも、密かに暴君といわれている国だ。
「逃げてきたのよ、せまっ苦しい場所からね。そう言うことだから…あたし、もう行くわね？助けてくれて、ありがとう」
ダルテは、勢いよくベッドから立ち上がり…。
転んだ。
「なっ、なんで足がいうこと利かないのよ～…こんな時に限ってぇ、もう！他人に迷惑かけるなんて、ちっとも主義じゃないのにっ」
転んだダルテは、潰れたまま、精一杯の抗議をしている。
「ほら、ムリするからだよ…体が弱ってんだ。とりあえずベッドに戻って…戻れるか？」
「ひっ、一人でできるわよっ」
抱きあげようとした、昴の手を払って、ダルテは一歩ずつ慎重に、ベッドに戻った。
「やれやれ、気ぃ強いなぁ。なんか食えるか？食いたい物、あるか？」
「べっ、別に…」
そこまで言いかけたダルテの、腹の虫が盛大に異議を唱えた。
ぷっと吹き出して、昴は、ダルテの頭をくしゃりと撫でて笑った。
「なにがいい？桃がいいか、梨もあるぞ？」
「桃でも梨でも…」
にこにこと、嬉しそうな昴に首を傾げつつ、ダルテは室内を見わたした。
「じゃ、梨な」
勝手に決めた昴に溜息をつき、ダルテは窓の外を眺めた。
鉛色の春空は、止めどなく大地に、涙を降らせる。
雨が、降っていた。
見わたした室内は汚れてはおらず、きちんと整理されて、家具や何

やらは、各々の場所に治まっていた。
室内に漂う雨の匂いが、なぜか、ダルテに森の中にいるような感銘を与える。
「ねえ」
「なんだ？気分でも、悪いのか？」
盆を抱えて戻ってきた昴に、ダルテは、ぽつりと言った。
「あなた、ここに一人なの？」
もじもじと尋ねたダルテに、昴は一つ瞠目をした。
「ああ、今はな…。見てのとおりさ」
笑った昴が、なぜか悲しげに見えて、ダルテは堪らず、その先を促した。
「今はって、前は誰かいたのね？…恋人？」
興味深そうに瞳を輝かせるダルテに、昴は、まるで子供に言い聞かせるように、ゆっくりと語りだした。
「今から５００年前、この世界ができてまだ間もない頃…ひどい、本当にひどい時代があったんだ。俺たち一族を狩る者が、大勢現れた」
「昴、あなた…妖？」
こくりと頷くと、昴は、盆を小脇に抱えて背中を向けた。
「当然、俺の母さんも…例に漏れずに狩られた」
「…ごめんなさい、そうとは知らなくて。聞くんじゃなかったわ」
「いいや、いいさ。今となっては昔話…知るものも少ない」
ダルテは息をのんだ。
似ているのだ…。
皇帝軍に灼かれた、その直轄地だった自分の村。
幼かった、自分の目の前で殺された母や、姉弟たち。
似ているから、どうということではないけれど…。
「多少…境遇が似ているみたいね、あたしたち」
けれど。
強く感じた近親感に、声が、心が震えた。

「皇帝は、人狩りを命じたわ…男は皆殺され、女の幼子は奴卑(ぬひ)に、娘たちは抗う者が殺され、その殆どが下女(はしため)にされたのよ…あたしも、その中の一人だった」
きつく、掛け布団を握りしめるダルテの手を、昴はそっと包んだ。
「境遇はどうあれ、今ある命に、感謝しなければ。いいかい？」
「変わってるわ、あなた」
いきなり『変わってる』と言われるなんて思っていなかった昴だが、もう言われ慣れているので、さほど気にはしなかった。
「はは…よく言われるんだ、それが」
はにかんで頬を掻く昴に、ダルテもかすかに微笑む。
「妖って、みんな人間を襲うと思ってここに来たのに…話とずいぶん違うのね」
「え？」
初めて見たダルテの笑顔に、昴は固まってしまった。
（かっ、かわいい…！）
なんだか、眩暈(めまい)がする。
心臓は早鐘を打って、痛いんだか、嬉しいんだかよく分からない。
変な気分。
それでも、いやな感じは微塵もなくて。
「昴？おーい」
放心状態の昴の目の前で、ぶんぶんと手を翳(かざ)すダルテだが、ややしばらく、反応が返ってこなかった。
「あ…なんだ？」
「あたし、ここ気に入っちゃった。一緒に、いてあげてもいいよ？」
「そうか…。って、ええっ！？マジか！？」
「あら、ダメ？」
がばっと身を乗り出した昴に、ダルテは、満面の笑顔を咲かせた。
「い、いや…ダメってわけじゃあ」
「きーまり決まり、あたし…ここにいることにするわ」
「い、いきなりだな」

急に元気になったダルテに押されて、昴は冷や汗をかいた。
「優しい妖もいるんだな、と思って…。ありがと、あたしを拾ってくれて」
「れ、礼なんかいらねぇよ…俺が、したくてしたことだからな」
照れ隠しに毒づく昴だが、ダルテの返事がないので見てみると、ダルテは、子猫のように丸くなって、可愛らしい寝息をたてていた。
「北から、よくここまで…一人で逃げてこられたもんだ、しかも女の身で。感服だよ」
ダルテの栗色の髪を撫でながら、昴は微笑んだ。
雨が止んだことに気づいた昴は、天窓から空を仰ぐ。
鉛色の雲はどこかに消え去り、白雲の間から、青空がのぞいていた。
「俺…マジでやばいかな、コイツのこと…」
その先は、空に。
石青の空に、吸いこまれて溶けた。
黄塵の地に、南風がなびくのも、そう遠くはないかも知れない。

嫉妬ですね…。（前書き）

人間に興味を持つ妖(あやかし)の少年・昴(すばる)は、逃亡中の人間の少女・ダルテを匿っていることが、まわりに、うっかりばれてしまい…？
人間との共存を夢見る妖の少年が、夢を抱いて黄塵の地を渡る。
異界が舞台に繰り広げられる、ラブロマンス

嫉妬ですね…。

ダルテを匿ってから2日も経たないうちに、どうも、どこからか彼女の存在が知られてしまい、昴は始終、ダルテの傍に張りついていた。

「昴ってば、大丈夫よ…なんか恥ずかしいわ？」

「いーや！大丈夫じゃねぇ、見張ってないとまた、ひっかき傷が増えてるじゃねえか！どこのどいつだ…見つけ次第、ぶん殴ってやるっ」

「ちょっとちょっと…」

朝から、ずっとこの調子が続いているのだ。

心配してくれているのは分かるが、はっきり言って、邪魔くさい。

ダルテがお気に入りな昴は、激しく（それも、かなり）アピールするが、今のところの効果はゼロ。

鬼ごっこのような2人の関係は、昴の村の村人を和ませているが、その裏で、嫉妬があるのもまた事実で…。

昴がいない、僅かな時間を狙って現れる影は、ダルテを恐怖の中へとたたき込んだ。

それでも、ダルテは持ち前の気丈さで、平常を保っていた。

音もなく現れる影。

勿論、妖なので当然だが。

「ダルテって、あんただね？昴のお気に入りだか、なんだか知らないけど…あんまり調子乗ると、痛いめ見るよ。これは警告だ…さっさと人間どもの村に行っちまえ！」

風が動いて、鮮赤の雫を散らせた。

「痛っ！何よ、アンタこそ姿も見せないでっ、その方がよっぽど卑怯じゃない！」

怒鳴った瞬間、ダルテの視界が、勢いよく反転した。

突きとばされたのだ。
黄土色の、土煙が起こる。
背中に重みを感じてダルテは、煙の中の影を、きつく睨んだ。
背中を、踏まれている…。
「認めない…あたしは、アンタなんか認めないからね！横恋慕もいいところだ、この泥棒猫っ、お前なんか、役人どもに突きだしてやるんだからっ」
ダルテは凍った。
追っ手が、ここまで手を回してきている！？
「な…ぜ、まさかっ」
「アンタ、追われてるんだってね。アンタを見つけ次第、連れてこいと言ってたけどこの際…一気に楽にしてやろうか」
ニヤリと意地悪に笑うと、彼女は、ダルテの襟首を掴み上げた。
小柄なダルテは、地面から足が離れて、じたばたともがく。

楽…？
すなわち、死ぬということ。
ずっと、そうしたかったではないか。
願ってもない。
生まれ落ちた罪－－－――－－生き残る罰に、ずっと苦しんできた。
もう、なにも苦しまず。
追っ手から逃げることもなくなる。
なのに。
そこに昴の顔が、ちらつくのは、なぜ？
生きたいと、思ってしまう。
ねえ、生きたいと思うのは…いけないこと？
「その、必要はないわ」
「その必要はねぇよ」
言葉が重なる。
ダルテの、首を締めあげていた手が離れ、ダルテは、気がつくとそ

の場に座りこんでいた。
「やっぱりお前か、蒼牙(そうき)！お前こそ大概にしねぇと…その首がなくなると思えっ」
ダルテは、別に怖かったわけでもないのに、喉が締めつけられて、声が出なかった。
「しっかりしろダルテ、ごめんな…怖い思いさせて」
昴は、蒼牙というらしい、少女をギロリと睨むと、ダルテを強く抱き締めた。
「ふんっ、せいぜい仲良くすることだねっ、お前たちなんか、絶っ対に、引き裂いてやるんだから！」
昴と同じ色の長い髪を、振り乱して走り去った蒼牙を見送りながら、ダルテは深い溜息をついた。
「ひどい目に遭わせてごめん、帰ったらすぐ、手当てしてやるからな？」
ダルテは、なにも言わずにきつく、血が滲むほど唇をかみしめた。
（どうしても、どこまで行っても、逃げ切れない！）
温もりを…。
決して幸せにはなれないと、分かっていても望んでしまうの。
生まれ落ちた罪、生き残る罰が…いつもついてまわる。
もういい、もうたくさんだ。
不幸になるのは、あたし一人でいい。
なにも、無関係な、昴を巻き込むことはないのだから。
このまま、ここを去ろう。
あの女・蒼牙だかの、言いなりになるみたいで嫌だけど。
昴が傷つくより、幾分かはマシだ。
「帰るぞ、来いダルテ」
肩を抱かれ、押されるまま、ダルテは歩いた。

辺りが、深闇に包まれた頃。
ダルテの部屋のドアが、せわしなくノックされていた。

「ダルテ、ダルテ！出てきてくれ、少しだけでもいいから、なんか食わねぇとっ」
昴は、ダルテの部屋のドアの前に張りついて、必死にダルテを説得していた。
「食べたくない…具合が悪いのよっ」
しばらく間をおいて、弱々しい返事が返ってくる。
「お前が心配なんだ、出てきてくれ、頼むよ！」
「……」
それからまた少しした頃、ドアが開いて、ダルテがやつれた顔を出した。
「じゃあ…少しだけ、もらうわ」

夕食の、雑炊さえ喉を通らないほど、ダルテは塞ぎこんでしまった。
一口をすくっては、さじを戻してしまう。
「気にするなよ、あんなヤツの言葉なんて…それより、ちゃんと食わないと、また弱っちまうぞ？」
ついててやるから食え、と諭す昴の優しさに、ダルテは再びさじを取り、一口ずつだが、ゆっくりと食べ始めた。
「おいしい…」
「そう、その調子だ」
嬉しそうに微笑む昴に、ダルテも笑い返す。
鍋に残っていた雑炊を平らげて、ダルテは椀を台所に戻した。
けじめは、つけなければいけない。
分かっているのに、なんだろう？
この胸の、つかえが取れないのは、なぜ？
「っきゃ！」
「おっとっ」
よろめいて、皿を落としそうになったダルテを、昴は慌てて、胸板で受け止めた。
目が合い、ダルテはあたふたと目をそらす。

「ごめん、ぼぅっとして…」
「いや、別にいいさ」
形容しがたい雰囲気が漂い始め、ダルテはさらに慌てた。
昴の目が、心なしか熱っぽい気がするのは、気のせいだろうか？
「昴、あの…離して、くれる？」
顔から火が出るとは、まさにこれを言うんじゃないだろうか？
目が、そらせない！
「いやだって、言ったら？」
コロコロ、と椀が、ダルテの手から転がり落ちた。
言いかえす間も与えずに、ダルテの唇は奪われていた。
「んっ、んんっ…や、ん…」
始めは、触れるだけのキスをして、それから愛惜しむように深く口づけ、舌を絡める。
（だっ、ダメ！後ろにはソファがっ、倒れ…）
杞憂（きゆう）するが、既に遅く…。
細いように見えて、案外たくましい腕に抱かれて、ダルテは酔った。
昴の傍にいると、とても落ちつく。
欲してくれる、彼が嬉しかった。
けど、ダメなものはダメ。
けじめはつけないと…。

まだ夜も明けきらない頃、ダルテはそっと、昴の腕から抜けた。
壁に掛けてあった外套（マント）を羽織って、静かに昴の家を後にした。
ダルテの頬を、いく筋も涙が伝いおちる。
立ち止まりそうになる自分を何度も叱咤して、ダルテは歯を食いしばって歩き続けた。
そうしてダルテは、いつか滑落した、断崖に来ていた。
「へぇ…あんた、出てくつもりなんだ？正しい判断だね、昴だって…ただ言わないだけで、絶対アンタみたいな女に困ってるんだ」
ダルテのすぐ真後ろに、蒼牙が腕を組んで立っていた。

「…またあなたなの、なんの用？」
睨みつけて言うダルテに、蒼牙は鼻を鳴らす。
「どこまでも憎たらしいったら、アンタを殺せば、昴はあたしのものになるんだ」
（あたしを殺すつもりなのは知ってたけど…執念深いわね）
「そんな事しても、どうにもならないわよ？」
「なるさ！役人にお前を渡して、褒賞金をふんだくる。金も昴も、あたしの思うがままだっ」
胸を張って言う蒼牙に、ダルテは溜息をつく。
「人の心ってのはねぇ！他人が好きにできないのよっ、あんた、バッカじゃないっ？」
しかし、急に重心が崩れた。
「バカはどっち？自分の状況、考えてもの言いなよ」
蒼牙に足払いをされて、ダルテは、崖の斜面にぶら下がる形になった。
「ほぉら、どうした…さっきの元気はどこ行った？」
乾燥して、粒の粗い砂でできた岩盤は脆く、ダルテが掴んでいる岩は、今にも崩れてしまいそうだ。
「この、卑怯者！」
「なんとでも言えばいいよ、お前はせいぜい、死んで笑いものになるがいい！」
足を振りあげた蒼牙は、砂塵を上げて、突然に吹き飛んだ。
殴りとばされたのだ、昴に。
「ダルテっ、掴まれ！早くっ」
「昴…？」
伸ばされた手と手が、しっかりと、きつく握り合わさった。
「いま引きあげるっ、手…離すなよ！？」
ぶんぶん、と頷いたダルテに苦笑いして、昴は力を込めた。
「まったく、急にいなくなるんだもんなぁ…そういうの、やめろ」
「ごめん、なさい…迷惑、かけたくなかったのよ」

引きあげたダルテを、昴はきつく抱き締めて叱った。
「こ、の…泥棒猫！あたしが先に昴を好きになったのにっ、人間の分際で昴を誑(たぶら)かして…お前なんか、殺してやる！」
「いい加減にしろっ！」
「ぎゃあ！」
ダルテに飛びかかろうとした蒼牙を、昴は蹴りあげた。
「貴様だけは許さん！身を以て、罪を味わえばいい。お前の力は奪わせてもらうぞ」
昴は、蒼牙の頭をわし掴んだ。
「なん、で…昴」
縮んでいきながら、蒼牙のしわがれた声が尋ねた。
「土遁(どとん)…封っ！」
子猫サイズに縮んだ蒼牙を、昴は、岩の中に押し込めて封印したのだった。
「お前みたいな下種(げす)には一生、分かるわけねぇよ」
（仮にも、女に手ぇあげちまった…嫌われた、かな？）
「すまねぇ、ダルテ…お前を危ない目に遭わせてばっかりだな」
へたり込んでいるダルテに、昴は、同じ高さに目線を合わせて苦笑いした。
「お前が行きたいなら、俺には止める権利はねぇ。ただ…力になってやりたかった」

ダルテは、じっと昴を見つめた。
昴は、包み込むように笑ってくれるけど。
時々、すごく悲しい目をする。
安心させようとしてるのは、ちゃんと分かってるのよ…。
「あたしだって、ホントは…出て行きたくなんかないわ。だけど、迷惑かけてしまうもの。あたしの行く先々、不運がつきまとう」
「来い、ダルテ…どうしていいか分からないときは、なにも考えるな。いいじゃねえか、互いが必要とするんだから、このままだって」

「え？」
昴はダルテを引き寄せると、くしゃくしゃと髪を弄んでから微笑んだ。
「帰るぞ、ウチに」
「…うん」

しっかりと握りしめた手から、優しさが伝わってくる。
暖かい、ふわふわした気持ちになるのは、そのせいだったんだ。
この出逢いが、たとえ偶然でも必然でも…。
出逢えてよかったと、いま…本当にそう思えた。

余談。
石猫になった蒼牙は、魔よけとして村の入り口に置かれたらしい。

落花流水（前書き）

人間に興味を持つ、妖の少年・昴（すばる）が、逃亡中の人間の少女・ダルテに恋をした！
真っ直ぐに想いを伝える昴に、なかなか素直になれないダルテ。
うーむ、この恋どうなる？
遮る物のない、ひび割れた大地を、人間との共存を夢見る妖の少年・昴が夢を抱いて荒野を渡る！
異世界が舞台に繰り広げられる、ラブロマンス

落花流水

「ほら昴ってば…早く起きてちょうだい！」
掛け布団が、勢いよく剥ぎ取られる。
ベッドの中心で、丸まっている昴を揺り起こすダルテ。
「うぅ…まだ眠てぇよぉ」
「もう、朝食の用意ができていてよ？いい加減に起きてっ」
丸まる昴の背中を叩くと、ダルテは急々と部屋を出て行ってしまった。
ドアの閉まる音を聞きとどけてから、昴は、ぱか…と目を開けた。
「もー少し、優しく起こしてくれたって…いいのになぁ」
それでも、ダルテと暮らしていると思うだけで、堪らなく嬉しくなる昴である。
いくら人間に興味があるとはいえ、それは、初めて昴の中に生まれた感情。
昴とダルテは、出逢って間もないながらに、激しく惹かれ合うようになっていた。
種族が違う、と蔑(さげず)まれても、生きられる時間が短くたっていい。
これを運命というならば、そうなんだろう。
こんなにも、ダルテが愛おしい。

居間、兼台所に下りると、そこには、既にダルテの姿はなく、木製のテーブルの上に、布巾の掛かった---レーズンとクルミの入った、ダルテ手作りのパンと、リンゴその物が1個が入ったバスケット---朝食が用意されていた。
外から、上機嫌なのか、ダルテの鼻歌が聞こえてくる。
なにをしているか気になった昴は、パンを片手に、窓辺に近づいた。
ダルテは、洗濯物を干しながら、絶え間なく、楽しそうに微笑んでいた。

（それにしても嬉しそうだな、行ってみるか）
用意してあった食事を平らげると、昴は外に出て行った。

「ありゃ…いねぇ！？」
昴が外に出た時、そこにいたはずの、ダルテが消えていた…。
きょろきょろと辺りを探していたが、やがて、昴は少しもとり乱すことなく、まっすぐ森の奥に向けて歩き始めた。
別に、確信があるわけではない。
けれど『そこ』に、ダルテがいるような気がしてならないのだ。
つまるところの、カンである。
森は、奥に入って行くにつれて、緑豊かになっている。
森の外郭を被う大木が、柔らかな緑を、囲むようにして守っているからだ。

しばらく歩いていくと、丈の短い花の群れの中。
案の定、ダルテは座りこんで花を摘んでいた。
夢中になっているらしく、まったく昴に気づいた様子がない。
『惚れた弱み』とでも言うのだろうか…。昴は、ややしばらくダルテに見とれていた。
「…ダルテ」
ダルテの傍に、昴は座りこんだ。
「あら、やっと起きたわね…見て、これキレイでしょ？」
「まあ…な」
照れ隠しに、ふいと顔をそむける昴。
そんな昴を気にしたふうもなく、にこにこと、ダルテは笑いながら花摘みを再開させた。
（かわいい…かわい過ぎるっ！）
鼻の下がだらしなく伸び、顔がゆるみ。
どこまでも、のろける昴。
のろけ過ぎて、顔のデッサンが崩れている。（誰か、この男を止め

ろ！）
その間も、ダルテは花を摘み続けた。
その隣で昴が、ろくでもない妄想を膨らませているとも知らず。
「っきゃ」
吹きつけた大風に、ダルテの髪と花びらが、嬲(なぶ)られて舞う。
「もうっ、いやな風ね！折角きれいに咲いてるのに、台無しだわっ」
乱れた髪を撫でつけながら、頬を膨らすダルテに、昴はぷっと吹き出してしまった。
「散ってしまうから、別に悪い訳じゃねぇぜ？風に乗って水に舞い。いつか遠い地で、また花を咲かせる。落花流水っていうんだ」
「え？」
ダルテは、ぽかんと昴を見つめた。
「ま、ホントは別の意味だけどな」
どういう事、と言いかけたダルテは、花の中に沈んだ。
色とりどりの、花びらが散る。
「な、なんなの？昴」
「落花流水にはな、別の意味がある…知りたいか？」
意味深に言う昴に、ダルテは可愛らしく、小首を傾げた。
「…なん、なの？」
ダルテは、どんどん頬が熱くなるのを感じた。
おそらく…いや絶対。今の、この体勢のせいだろう。
昴に、押し倒されているのだ。
それからすぐに、唇に柔らかな衝撃。
キス、だった。
それも、息のつく間も与えない、荒々しいもの。
貪るように…深く、深く。
なにかが、ごっそりと攫われていくような感じがして、ダルテはぎゅっと目を閉じた。
「んんっ…ふっ、ふあっ？」
突然の終わりを告げられ、ダルテはひどく噎(む)せる。

しかし、不思議と嫌なものは浮かばず。
むしろ、その真逆の気持ちさえ生まれた。
（あたし…この人のこと、愛してる）
「…こういう事だ。俺とお前が愛し合うように、男と女が、自然に惹かれ合うこと」
「さらりと言うのね…愛し合う、だなんて」
ダルテは、恥ずかしさのあまり、まっすぐに昴が見られなかった。
「だーって、そのとおりだろ？」
ゴロゴロと、喉を鳴らして甘えてくる昴を、ダルテはフタ押ししてやり過ごす。
「先に帰るっ！」
「って、なに怒ってんだよ…待てってば、ダルテ！」
「いやっ、絶っ対にいやっ！」
ずんずんと、先を行くダルテに、昴は小走りについて行く。
実は、なかなか素直になれないダルテは、気持ちの急激な変化に、困っているのだった。

その末に結局…。
ダルテは、クローゼットの中におこもり。
昴は、所在なげにうろつくばかりだった。
「ダルテ！謝るから、とりあえず出てきてくれよぉ」
「い・や・よ！もうっ、昴のバカッ、エッチ、色魔っ」
「そっ、そこまで言わなくたって…仕方ねぇだろ、それが男のサガ…って違う！とにかく謝らせてくれ～っ」（泣）
「も～っ…いやったら、いやっ！」
「あうぅ～」
そうして、いつの間にか…夜は更けていくのだった。

落花流水（後書き）

ども、維月です。ううむ…ダルテ、書いてて楽しいですね、意地っ張りで、強気な女の子。（これって、どうなんだろう？）<ｂｒ>恋愛模様を書くのは、難しいですが、結構楽しんでます。<ｂｒ>こんな私でもよろしければ、ぜひ次回もご期待くださいませ。それでは。

涙華（前書き）

昴とダルテの間に亀裂が！？<ｂｒ>二人を引き裂く互い違いの歯車は、残酷にも始動を始める。<ｂｒ>実は、ダルテは…<ｂｒ><ｂｒ>遮る物のない、ひび割れた大地を人間との共存を願う妖の少年・昴（すばる）が夢を抱いて荒野を渡る。

涙華

ダルテは、妙な胸騒ぎを覚えて、ベッドの中で身を固くした。
いつもならまだ眠っている頃なのに、今日はなぜか、早くに目覚めてしまったのだ。
周りは、まだ僅かにうす青かったが、見あげた空は明けているようで、白く、無機質だった。
ダルテは窓を開けると、舞い込んできた、まだ冷たい朝風の中で目を瞑(つぶ)った。
「ついに、『この時』がきたのね…やっぱりあたしは、行くしかないんだわ」
ダルテは、感じ取っていたのだ。
平穏に見えた暮らしの中で、着実と迫りくる、追跡者の影を。
ついに来た…。
昴との、訣(わか)れの時が。
来てしまった。

ダルテは部屋を整えると、まだ眠っているだろう、昴の部屋に入っていった。
安らかな昴の寝顔に、涙をこらえて微笑み、ダルテはそっと頬寄せる。
「ずっと、素直になれなくて…ごめんね。大好きよ?昴…あたし、あなたを本当に愛してた」
昴を起こさないように口づけると、テーブルの上に手紙を置き、ダルテは去っていった。

ダルテが昴の村に行くと、顔見知りの村人達が、ダルテを囲んだ。
「ダルテ、本当に言いだしづらいんだが、昨夜にお役人が来てな」
「ホント、あんたにゃ悪いと思ってるんだが…」

囲んだ村人たちが、ぽつりぽつりと言い始める。
「すまんダルテ、これも…群れ存続のためなんだ。分かってくれるな？」
たくさんの、哀願の瞳に見つめられて、ダルテは一歩を踏み出した。
ダルテとて、昴や、その村人たちを、危険にさらしたくはない。
「分かったわ…あたし、行きます。ごめんなさい…今まで、どうも、ありがとう」
語尾が、掠れた。
ギュッと引き結んだ唇から、血が伝う。
深々と頭を下げた、ダルテの頬を、涙が伝っては散った。
「…迎えは、もう来ているだろう…尖梁（せんりょう）に行きなさい」
ダルテは無言で頷くと、背を向けた。
尖梁は、白圭で唯一の高台である。
ダルテが滑落し、蒼牙と対峙した場所でもあった。

ダルテは走り出す。
決心が揺らぐ前に、ここから離れなければ。
きっと－－－――出逢ったのも罪、恋したのも罰だったんだろう。
だから、こんなにも痛い。
誰かの傍にいることが、こんなにも、心安らぐだなんて…。
初めて玄椿宮で、皇帝の前に引き出された時は、殺意さえ抱いたのに。
信じられなかった。
自分が、ここまで、人を愛せたことを。

昴は、ゆっくりとベッドから起き上がり、きょろきょろと周りを見まわした。
空気が、いつもと違うように感じたのだ。
いつもなら、こんなに早くに起きたりはしない。
けれど、たとえようのない、不安にかき立てられ、黙っていられな

くなったのだ。
ふと目の端に、二つ折りの紙切れが映って、慌てて昴は飛びつく。
それは、短い文で書かれた、手紙だった。
【お願い、あたしを…忘れてちょうだい。これ以上、昴たちを困らせたくないの、だから、もうこれきりね…さよなら】
尖った文字は、所々震えていた。
「なに考えてんだよ…できるかよ、そんなの！」
握り潰した手紙を放り投げて、昴はすみかを飛び出した。
ダルテが、どこに行ったかなんて、見当もつかない。
けれど、とにかく走った。
離れたくない！　離したくないっ！
ただ、その一心で。

　ダルテを待っていたのは、武装した兵士たちと、４頭の青い馬――三雛（さんすい）が繋がれた馬車だった。
「ずいぶん、強引なお迎えね？」
鼻白むダルテを気にもせず、人群れの奥から、青白い顔の優男が現れ、ダルテの足元に跪（ひざまづ）いた。
それと同時に、兵士たちも一斉に伏礼する。
青白い顔の優男は、青国の宰相で、年の頃はダルテと大して変わらない。
「畏（おそ）れながら王妃様、村人には一切、危害は加えておりませぬ」
「フン！」
宰相の、飄々とした態度が、ダルテの神経を、さらに逆なでした。
「主上も、ひどく御心を砕いてらっしゃるご様子。さぁ、早くお戻りください」
「押さないでっ、自分でできるわよ！」
強く掴まれた腕を、振り払うダルテ。
自分から馬車に乗り込んだことを、ダルテは深く後悔した。
もう二度と、ここには戻れないだろう。

宮城の、奥深くに幽閉されて終える一生。
それが厭(いや)で逃げたのに、結局このありさまだ。
諦めかけたその時、ダルテは空耳を聞いた気がした。
昴の声だ。
それに混じって、兵士たちの怒号も聞こえてくる。
「ダルテ！ダルテ－－－－－っ、そこにいるんだな？！」
「村の小童(こわっぱ)がっ、さがれ！おのれなぞ、一目たりとも罷(まか)りならぬっ」
「そんなの、知ったことか！ダルテは、ダルテだろうがっ」
（いけない！このままではっ）
このままでは、兵を挑発してしまう！
ダルテは叫んだ。喉が、裂けんばかりの声を張り上げる。
しかし、兵の怒号や、馬の嘶(いなな)きにかき消されて届かない。
「分からぬ奴だ…射士、構えっ！」
一瞬にして、空気が凍りついた。
殺気が、一つに集中しているのだ。
「やめてっ！その人を撃たないでっ、あたしを迎えにきたのでしょう？戻ります、だからやめて！その人は…あたしとは、なんの、関係もないわ」
車内からまろび出たダルテは、昴を背に庇い、周りに分からぬよう、小声で謝った。
「ごめんね、昴…関係ないなんて言って、でも…こうするしかないの。分かって」
「…ダルテ、俺、絶対お前を迎えに行くから、待っててくれっ」
ダルテは頷くと、諦めたように笑い、馬車の中に消えていった。
号令と共に動きだした、馬車が去っていくのを、昴は、ずっと見送っていたのだった。

夜明けの月（前書き）

昴と引き離され、ついに玄椿宮に連れ戻されてしまったダルテ。王妃という使命を押しつけられ、ダルテは使命と恋の狭間で揺れる。

遮る物のない、ひび割れた大地を、人間との共存を願う妖の少年・昴（すばる）が夢を抱いて荒野を渡る。
異世界が舞台に繰り広げられる、ラブロマンス

夜明けの月

玄椿宮に戻されたダルテは、自室に閉じこもると、声をあげて泣いた。
泣いたところで、今の状況が少しも変わらないのは、分かっている。
分かっているのに、吐き気がするほどに痛かった。
何もできない自分を、心底から呪った。

どれくらい、そうしていたのか。
ダルテは、月明かりの中で目を覚ました。
潮騒が室内に、軽やかに木霊している。
ダルテは、ゆっくりと起きあがると、静かに窓辺に近づいた。
夜明けが近いのだろう、どこまでも、うす青い海の上に、月が溶けていた。
けれど、なんの感情も浮かばない。
思い出すのは、必ず迎えに行くと言った、昴のことばかり。

ダルテの部屋に宛てられているのは、全面が玻璃で作られた温室だった。
海際の、崖に置かれているダルテの部屋は、本来ならば後宮にあるべきなのだが、ダルテに甘い皇帝が、贅を尽くして、作らせた物である。
美麗に着飾って、珍しい料理や、菓子を食べても、ダルテは少しも幸せではなかった。
このままではいけない。
何とかして、ここから逃れることを考えよう。
‐‐‐――‐――‐でも、どうやって逃げればいい？
「お帰りなさい、お姫様…今度はどちらまで行かれた？」
ダルテの後ろで声がする。

しかし声の主の姿は、どこにも見当たらない。
ただ、闇が横たわっているだけだ。
どこにいるかというと‐――‐‐‐―足元である。
足元の、ダルテの影の中に隠れている。
これを遁甲（とんこう）といい、妖の類ならば、なんであってもできる術だ。
「月代（つきしろ）、ちゃんと顔見せてよ…久し振りなんだから」
はいはい、と返事が返ってくるとすぐに、影の中から、銀色の獣が躍り出た。
孟極である。
月代と呼ばれた孟極は、ダルテの従者として傍にいるが、実は斥候（せっこう）で、妖たちへの情報提供をしている。
ダルテとは志（こころざし）が合い、宮城からの、脱出を企てているのだった。
「あ‐‐‐――‐懐かしい匂いがする、白圭か。しかし随分と遠出したな？」
ぶるっと身震いすると、月代は、短髪の青年に変わった。
「遠くに、行きたかったの。楽しかったわ…全部が珍しくて」
ニヤニヤとしている月代に、ダルテはその柳眉を寄せた。
「いやね、笑ったりして…なぁに？」
「そんな顔、初めて見たよ…恋でもしたのか？」
「したわよ…」
「言ったな、しかも素直に」
ダルテは、疲れたような、泣きそうな顔をする。
触れたら、崩れてしまいそうなダルテに、月代は、ポリポリと頭を掻いて困った顔をした。
「昴だろ？そいつ」
「同族は、すぐ分かるのね…そうよ、彼の所にいたの」
（こいつ！？）
月代は、まじまじとダルテを見る。
「厄介だな、ひとヤマ起きるぜ？」
「ひとヤマって、昴…まさか！」

ダルテは、夜目にも青くなった。
向かってくる昴に向けられる、射士が放つ矢砲(しほう)の雨。
そして斃(たお)れる昴。
「どうしよう月代！このままだと昴がっ、そんなのイヤよっ…ねぇどうにかして？」
「いくらかける？」
しがみついたダルテを見おろして、月代は、ニカッと笑った。
彼は、いつもそうなのだ。
いくらといっても、妖と人間の金銭感覚は違うので、それに相当する物で、やりとりするのである。
「…キス、したげる」
「は！？」
ダルテの爆弾発言に、月代は、目を丸くして身を乗り出してしまった。
「マジかよ…って違う！俺は横取りしねぇ主義だっ」
「じゃあ、なにがいいのよ」
ぶーっと顔を膨らすダルテに、月代は首をすくめる。
「そうだなぁ…木天蓼(またたび)一握りかな」
「ふうん…やっぱり猫なのねぇ」
しみじみと言うダルテに、月代はコケた。
「猫じゃねぇよ…これでも一応、妖怪なんだぞ？」
「分かったわよ、木天蓼ね…すぐ用意するわ」
ダルテは、ベッドの脇の棚から、黒檀(こくたん)の小箱を取り出した。
いつも傍に（宮城内では）いる月代のために、ダルテは木天蓼を部屋に常備しているのだ。
「サンキュ。なぁダルテ？キスってのは、俺たち妖の中では重要なことなんだ。もう…しかも、俺なんかに言うな」
「重要って、どうして？キスはキスじゃない」
可愛らしく首を傾げるダルテに、月代は、真っ赤になって頭を抱えた。

月代が言う重要性というのは、妖たちにとって、キスという行為自体が、プロポーズを意味するのである。
「どーしても！」
「ふーん、ねぇ月代…あたし、なんかもう疲れちゃった」
「どういう意味だ？」
孟極に戻って、木天蓼にじゃれていた月代は、緑黄の瞳を丸くした。
「死にたい…でも、それができないの」
死－－－－－－しかしそれは、一瞬のきらめきで、永遠の空白。
ぽそ…とベッドに倒れたダルテに、月代は、いたたまれなくなって頬を寄せた。
（哀れな…齢１６で、王妃が務まろうか…こんなに細くて、震えているのに。必ず、昴の所に戻してやるからな！）
「ダルテ、俺に任せろ、策がある」
「策？」
ダルテは、ひょくっと首を傾げる。
月代は、そんなダルテの、頭を撫でてから笑った。

小さな宝物（前書き）

青国の玄椿宮のダルテの自室では、紛争が起こっていた。
あくまでも、ダルテを縛りつけようとする青国王・玻渓（はけい）…。ダルテは、必死に腹にいる、昴との子を守ろうとする。
遮るもののない、ひび割れた大地を、人間との共存を願う妖の少年・昴が夢を抱いて渡る。
異世界が舞台に繰り広げられる、ラブロマンス

小さな宝物

王-----青国王は、不機嫌だった。
群青色の髪を、ガシガシと掻き上げるこの男の名を、玻渓(はけい)という。
昨年崩御した先王に代わり、若干21にして現在、150代目の玉座を継いだ。
不機嫌の理由は、今から数時間前…朝方まで遡る。
それは正寝(せいしん)、閨(ねや)でのこと。

「イヤですっ、放して！放してちょうだいっ」
「なにが不満だっ、なぜ余を拒む！？」
ベッドに、ダルテを押さえつける玻渓。
「さぁ？自身の胸に聞いてみれば！？放してよっ」
その手を噛んで、ダルテは身を翻(ひるがえ)した。
「戻れっ、戻らぬか！主命じゃっ」
荒い息で、乱れた衣を直しながら、ダルテは、ベッドの上にいる主を、射殺すほどに睨んだ。
「あたしは、誰にも媚びないっ、好きで、アンタの傍にいるわけでもないっ！」
「ダルテっ！？」
呼んでも、振り向かずに踵を反(かえ)したダルテに、玻渓は爪が食い込むぐらいに、きつく拳を握りしめた。

「うぐ、げほっ、まったく…冗談じゃないわよ！」
ダルテは、寝そべっている（孟極の姿で）月代を、ぐしゃぐしゃと撫でながらこぼしていた。
「主上の夜伽(よとぎ)を断ったって、宮城中の噂だぜ？ま、お前の気持ちも分かるけどよ」
月代は、乱れた毛並みを毛繕いしながら言う。

「最近、変なことが多いの…カンが、鋭くなったし、それにね…背中に痣ができてるの」
「痣だって？」
月代は、ぴたりとその動きを止めて、神妙な目でダルテを見た。
「そう、背中から…こう、お腹の方まで。なにかの病気かしら？」
思案顔をして、泣きそうなダルテに、月代は思いきり笑い転げた。
「ちょっと、なに？笑ってないで、教えてよぉ」
「あー…悪い悪い。あのなダルテ、『おめでとさん』だ」
「え？」
一瞬、きょとんとするダルテに、月代はまたも、にんまりと笑う。
「…昴とは、ヤったんだろ？そのツケだ」
「ツケって、あたし…子供が！？」
「そっ、だから験がでた」
にっこりと、月代。
「や、やだぁ～…」
一気に、カァッと赤くなるダルテ。
「やだって、なにがだよ？」
「だって、そんなこと…急に言われたって」
「まあ、なるようになるさ…深く考えん事だな」
しゅんと、項垂れるダルテに、月代はあっけらかんと笑った。
「月代って、なんだか父さんみたい…あったか～い」
ふかふかの毛並みに、顔を埋めるダルテを、月代は尻尾の先でつつく。
「ったく昴のヤツめ…一丁前に嫁なんか取りやがってよぉ」
「そう言えば、月代って…昴と親しいの？友達？」
「いーや、友達ならまだマシさぁ…アイツは、俺の息子だよ」
「うそ…」
ゴロゴロと、喉を鳴らして甘えていた月代は、ぽろりと爆弾発言をした。
「そ一いうことっ、じゃあ…俺は用があるんで、ちょっくら出てく

るな？」
ころんと、転がって人の姿になると、月代は、窓から出て行ってしまった。
「またいきなり…それは信じるけどさ」
月代が出て行ってしまってから、ダルテは、ぽつりと呟いたのだった。

「くしゃん！なんだぁ…噂でもされたかな」
その頃昴は、ダルテ奪還のために、白圭から青国に向けて、北東の方角に走っていた。
現在地は青国首都・烏号（うごう）、秧州（おうしゅう）までは、後2粁（キロメートル）の距離だ。
昴は、ぐるりと、あたりを見まわした。

市井は、市場などの活気で賑わい、道ばたで芝居をする旅芸人の一座や、水飴や、団子の屋台などさまざまだ。
「やれやれ、結構走ったなぁ…熱ィ」
昴は、額から垂れた汗を拭って、石青の空を見あげた。
木陰に座って、水筒の水を飲もうとした昴を、その時、ひどく静かな声が遮った。
「見つけたぜぇ、昴…俺を、覚えてるだろ？」
「親父！？なっ、なんだ、今度はなんの用だよっ」
覚えのある、妖気を身近に感じた昴は、せわしなく周囲を見まわす。
「落ちつけ、ちと訳ありでな…今は、とある姫さんの護衛をやってるんだ」
影の中から、むくりと起きあがった男－－－－月代は、息子・昴の手から水筒を取り上げて、一口含んだ。
「姫…護衛って」
昴は、ぴくりと神経を尖らせる、それが、ダルテのことかも知れないからだ。
「その姫さんはなぁ、他に好きな男がいて…毎日話すのは、そいつ

の話ばっかりさぁ。いたたまれねぇよ、まったく」
「ダルテっ、元気なのか！？親父、他になにか、なにか言ってなかったか？！」
（おっ、想像どおり…ダルテにゃ悪いが、言うか）
想像どおりの反応をした息子に、月代は面白そうに、ニヤリとした。
「そうだなぁ…腹の子が、どうとか？」
（って、ビンゴかよ！？）
腹の子、と聞いた、昴の顔色が、みるみるうちに青くなった。
「なんだって！？ダルテ、身重なのかっ、誰だっ、誰のヤツだよ！」
ガクガクと、襟元を締めあげられ、月代は、じたばたともがいた。
「てめっ、こら離せ！誰のって、てめぇのヤツに決まってんだろが、このアホ！」
語尾の『アホ』を強調され、昴は半歩押される。
「アホっていうな！…ダルテに、俺のガキが」
「暴力はんた～い」
うっとりとしている昴の片足は、しっかりと、月代を地面にめり込ませていた。
「そういうこった、俺が道を教える。けど…くれぐれも、表には顔を出すな。遁甲してれば見つからねぇ、いいな」
「おう」
「ついてこい。なるべく、急いで行かねぇと、なにがあるか分からん場所だ」
月代は、そう言って影の中に溶け、それにすぐ、昴も続いた。

深闇の底には、道がある。
遁甲した妖たちは、本能でそれを知っているのだ。
昴は、前を歩く父を、じっと見ていた。

「昴…会えるんだわっ、早く来ないかしら」
「誰に逢うだと？そういうことか、ダルテ」

ひどく冷徹な声に、ダルテは反射的に身をすくめた。
ダルテの部屋の扉の前に、玻渓が腕を組んで佇んでいたのだ。
「玻渓！なんでここにっ…全部聞いてたのね！？」
「今すぐに、術者と追っ手を向ける。それが嫌なら、お前がこちらに来なさい」
「いやっ、いやよ！あたしだって、なにもできない訳じゃないわ…アンタの操り人形なんて、もうまっぴら！」
みるみるうちに、玻渓の顔が朱に染まった。
「っく…あ！？」
目の前が反転して、ダルテは、壁に押しつけられる形で、ギリギリと首を締めあげられていた。
「なぜ余に従わぬ！お前を拾って、ここまでにしたのは誰だと思っているんだっ、さぁ言えっ、お前の夫の名を！」
ダルテは、乱暴に喉元を掴んでいた、玻渓の手をむしり取る。
「安心しなさいよ…少なくとも、アンタじゃないわ。人の心ってものはねぇ、他人がどうこうできるものじゃないのよ！」
「貴様ぁっ、それが…主に対するもの言いか！恥をしれっ」
ぐいと、栗色の髪を鷲掴むと、玻渓はダルテを床に突きとばした。
玻渓は、突きとばしたダルテの背中を、何度も蹴った。
「うっ…ぐっ！昴も、このお腹の子も、絶対、守ってみせるんだっ」
「戯言（たわごと）を！おあっ」
玻渓は景気よく転がり、したたかに、何度も床に頭を打ちつけた。
「ダルテになにをしたっ！事によっては喉を食い破るが、よいか！」
グルル、と牙を剥いた孟極に伸しかかられ、玻渓は、腰を抜かして青くなる。
さっきまでの、覇気（はき）はどこへやら。

「すまねえ、ダルテ…しっかりしろ」
人型の月代が、ダルテを抱き起こした。
「平気よ…月代、ちゃんと護ったもの。あたしと、昴の宝物」

「金輪際、ダルテに、指一本触れることは許さん！人の王よ、心得るがいいっ」
昴は、底光りのする瞳で、玻渓を睨みすえた。
「あわ…わ、分かった…分かったから、殺してくれるなっ」
昴が下りると、逃げるように、正寝に閉じこもってしまった。
「今度ダルテに触ってみろ、かみ殺してやる！」
鼻息荒く言った昴に、ダルテはうっすらと微笑んだ。
「昴…あたし嬉しい」
昴は、きつく、きつくダルテを抱きすくめた。
「ダルテ…親父から聞いたんだが、その、子供ができたって」
瞬間、ダルテは、傍に座っていた月代の耳を引っ張った。
「どういうことかしら？」
「い、いや、だって…」
もの凄いオーラに気圧されて、月代は昴の後ろに隠れる。
「もう！月代ったら、黙っててって言ったじゃないっ…ひどいわ」
「だーって、待ちきれなかったんだよ」
ぶーっと、膨れる月代。
なにげに、大人げなかったりする。
「昴…ここにね、ちゃんといるのよ？こんなに狭いのにねぇ」
愛おしげに腹を撫でるダルテに、月代は溜息をついた。
「あー…ついにジジイになっちまったよ」
「もう、とっくにジジイだろうが」
昴が茶化すが、月代は、えへんと胸を張る。
「外見はまだイケるぞ」
「なにがだよ」（怒）
妖怪の外見は、種族によって多様だが、これだけは共通している。
本体が、極端に年を重ねた場合でなければ、外見も伴わないのである。
月代の外見は、見かけ、２０代。
昴と歩いていても、兄弟のようだ。

「月代、ありがとね？昴を連れてきてくれて」
「おうよ」
孟極に戻った月代は、ころんと、床に寝そべって言った。
「やっぱり安心するな…お前と一緒だと」
広いベッドに座っているダルテに、昴は喉を鳴らして甘える。
「そうねぇ…久し振りよ、こんな気分は」
いきなり漂い始めた甘いムードに、月代は慌てて床下へ遁甲（逃げた）した。
「って、こら！見せつけんなよ…俺もう隠れるっ」
石青の海は、やがて黄昏へと彩りを変えてゆく。
不鮮明に濁った夕空は、ダルテの心象のように、黄塵の大地を染めた。

小さな宝物（後書き）

維月です、恥ずかしい。
穴があったら隠れたい…。

傍にいるよ（前書き）

青国・玄椿宮に連れ戻されてしまったダルテ。
ダルテは、傍仕えの月代が、昴の父親だと知り、昴を交えて脱走を企てる。
母になったダルテは、果たして無事に脱走を果たせるのか！？
異世界を舞台に、繰り広げられるラブロマンス

傍にいるよ

ダルテは、かつてない幸せの中にいた。
抱き締める昴の腕の中で、身じろぐ度に、ベッドが軋む。
ふわふわ、ふわふわ漂って。
どこにいるのか、分からない。
「ど、こ？昴」
伸ばした手を、優しく握りかえしてくれる、昴の大きな手。
「ここにいる…分かるだろ？」
軽やかに降ってくるキス。
もう何度目だろう？
くすぐったい。
もっと、傍にいたい。
「ねぇ？昴」
「…なに？」
気だるげに顔を上げた昴に、ダルテは、ふわりと微笑んだ。

「もし…あたしが死んじゃっても、あたしを忘れない？」

「ダルテ！」
素っ頓狂な声を出す昴を、ダルテは思いつめた瞳で見る。

「当たり前だろうが…どうした？」
「ううん、ごめんなさい…。ねぇ、あたしを離さないでいて？」
「お、おう」

青国皇帝・玻渓は、術者の鏡を使った方術で、王妃・ダルテと昴の情事を盗み見ていた。
玻渓は、ダルテを愛してはいなかった。

人狩りの際に見つけた、愛玩動物ほどにしか、思っていない。
しかし、いざ自分以外の者が触れるのを見ると、どうしようもなく腹が立つ。
我慢できないほどに。
「あの妖、狩ってしまう事はできるか？お前、答えよ」
玉座の上から、伏礼する数名の術者のうちの一人に、玻渓は尋ねた。

「あの妖は、言ってしまえば単なる猛獣にございます。射殺してしまえば、簡単に片がつくかと」
長い金髪を、無造作に束ねた男が、伏せていた顔を上げて応えた。
「台輔（たいほ）、夏官に伝えて射士を集めよ」
「御意に」
台輔とは、宰相（さいしょう）のことである。
この男の名を、刹霞（せつか）という。
刹霞が席から立った瞬間、正寝の扉が、勢いよく開いた。
「そんな事、させないわよ！」
部屋中に響いた怒声に、術者たちは勿論、刹霞や、皇帝の玻渓までもが怯んだ。
ダルテだ。
かつかつと、ヒールの音が玻渓に向かうのを、術者たちは、茫然と見送った。
「アンタに、あたしや昴を罰する資格はない！覚えておいて、立場を利用しようだなんて、思わない事ね」
「きっ、貴様…無礼にも程があるぞっ！おい刹霞、夏官を」
指先を突きつけられた玻渓は、顔を真っ赤に紅潮させて、ダルテに怒鳴る。
呼べ、と続けようとした玻渓は、万力で腕を締めあげられて、ヒッと喉の奥を鳴らした。
「おっと…動くなよ？命が惜しけりゃ、動かんことだ。足首、いや首かも知れねぇな、パックリいくぜ？」

月代は、ニカッと笑うと、締めあげる腕に力を込めた。
「なっ…なっ、お前は！ダルテの従者っ」
じたばたと、身じろぐ玻渓に、月代は溜息をついた。
「だーから、動くなって…今な、こいつら腹減ってんだよ。姫さんの前での殺傷は避けたい…眷属共に食われたくねぇなら、追うのは止しな」
月代が、つま先で床をつつくと、無数の低い唸り声がした。
「いいな、覚えとけ…俺の息子と、娘に手ぇ出すなら、その時は貴様の命の終焉だと思え」
昴は、ダルテを抱えると、ふわりと窓から数メートル下の、地面に飛び降りた。
月代は、底冷えのする瞳で周囲を威圧すると、床下に潜む眷属たちに、ここを頼む、と一言告げて、昴の後を追った。

昴は、ダルテに衝撃を与えないように、大切にしながら、白圭まで戻った。
「動いたわ…今」
昴の腕の中で、ダルテはぽつりと呟く。
「ん、どうかしたか？」
昴のすみかに戻ったダルテは、ソファに、昴と二人で寄り添っていた。
「お腹の子…いま動いたのよ、すごく蹴ってる」
「ここにいるって、言ってるみてぇだな」
ダルテの、少し膨らみ始めた腹を、昴は、愛おしそうにそっと撫でた。
「ええ」
「お～い…俺もいるぞー？お忘れなく」
キスしそうになった新婚夫婦を、月代は、ひらひらと手を振って阻止した。
見かけは若いのに、なにやらジジむさい。

「月代って、あたしより少し年上っぽい外見だけど、実は若作り？」
ぐさっと刺さる、言葉の直撃。
月代は、かなり怯んだ。
「さっ、刺すなよ…これが地なんだっ」
「若年寄？」
「いや、ただのジジイだぜ？」
そこに、いつの間にか昴も参戦。
「やめんかっ、刺すなってんだろうが！」
汗だくで、必死に弁解する月代に、どっと笑いが起こる。
ダルテは、今が一番幸せだ、とばかりに、孟極になった昴を抱きあげた。
（みんな、いてくれる…昴も、月代も、お腹の子も。あたし、もう一人じゃないんだ）
「ダルテ、泣いてるのか？」
銀の豹が、目を細めて、ダルテの頬を伝った涙を嘗（な）め取る。
「いいの…今、すごく幸せなの、あたし」
だから少し、もう少しだけ…このままで。

ゆがんだ愛（前書き）

遮る物のない、旱魃でひび割れた大地が広がる、数百年後の世界が舞台。
逃亡中だったダルテは、妖の少年・昴と出逢い、恋をする。玻渓の妨害を、共に乗りこえた二人はその末に結ばれ、ダルテは昴との子を懐妊。
人に惹かれる妖と、妖に惹かれる人間。
二人は、幸せになれるのだろうか？

ゆがんだ愛

昴は、風の中でぴたりと動きを止めた。
遠く、かすかに咆哮が聞こえたような気がする。
妖魔のものではない、人間の叫び声だ。
それも、鬨(かちどき)の声。
憎悪で大気が穢れていて、ひどい胸やけがする。
昴は鼻の頭に皺を寄せると、くるりと踵を返した。

青国、玄椿宮の一室。謁見の間の、玉座にて。
玻渓は、跪礼した官吏たちが一面を埋め尽くす中、大音声で言った。
「王妃を連れ去った妖を、一族郎党、全て殲滅させることを命ずっ、勅命だ！」
官吏たちは、一斉に是を唱えたのだった。
翌日早くに、討伐隊が組まれ、玄椿宮の禁門を数万の騎馬兵が出て行った。

「そうか……ご苦労さん」
ダルテの、足元に寝そべっていた月代が、ふいに呟いた。
どうやら、眷属からの使令らしい。
「月代？」
心配そうに覗き込んだダルテに、月代は『大事ない』と不敵に笑う。
「調子こきやがって、あのバカ（玻渓）……騎馬兵よこしたな」
「きっ、騎馬兵？！」
ダルテは、慌てて聞き返す。
騎馬兵は、大規模な戦でも起こらない限り、動くことがないからだ。
戦と言っても、たかが知れているが、戦となれば自国だけではなく、他国にまで無用な被害を出すことになる。
それだけは避けなければ。

止めなければ！
なんとしても……。
ダルテは、きつく唇を噛みしめた。
「さ～すが暴君、やることが違うねぇ……けど、所詮若造だ。こっちにゃ、いくらでもテはあるんだぜ？妖怪ナメんじゃねぇ！」
すっくと、起きあがると同時に人型になり、月代は拳を握った。
「なぁ親父、アイツ（玻渓）噛み殺していいか？」
ぽろりと、えげつないことを言ったのは昴だ。
「やめとけ、んなバカ喰ったらバカが移る。これ以上バカになってどうするんだよ」
からからと笑う月代に、昴は、本気なのか戯れなのか曖昧に食ってかかる。
「バカって言ったヤツのが、もっとバカだ」
ころんと寝そべって、ダルテに甘える昴。
「もう……二人とも、戯けてられる状況なの？」
「問題なし、アイツら（眷属）に夜闇に乗じて数を減らせといっておいた」
さらりと言って、しなやかな尻尾をぱたつかせる昴。
「減らすって……」
（そこは聞かないけど……たぶん、絶対殺すのね。簡単に言える妖怪って、そこら辺がスゴイ）
---と、ダルテは、ふいに胎動を感じて『ほぅ』と安堵の溜息をついた。
「どした？ダルテ」
ふに、と首を傾げる昴に、ダルテはふんわりと微笑んだ。
「お腹の子……この子ね、最近よく蹴るの。ほら、分かるかしら？」
ダルテは、孟極姿の昴の頭を抱いて、まろい腹に耳をあてがった。
「すげぇ……ボコボコ言ってるなぁ」
一見、微笑ましい光景だが……。
あまりの糖度の高さに、月代は「うぇ～っ」と顔をそむけて毒づい

た。

「ねぇ、あれ……『暴君』のとこの騎馬兵じゃない？」

黄砂混じりの風が、はたはたと長い銀髪を嬲(なぶ)っていく。

青国の東寄りに位置する瀛国(えいこく)の崖の上、二つの影のうち一つが、広野を疾駆していく騎馬兵の群れを見送りながら言った。

「青国軍か、ダルテ……他の奴らの話だと、孟極の村にいるって言うが。このザマからして、ガセじゃあなさそうだ」

「行こう、鉄(くろがね)……あたし、早くあの子に会いたいっ」

鉄と呼ばれた短髪の男は、グイグイと袖を引っ張る双子の妹・セリンの頭を撫でた。

「ああ……行くぞっ、セリン」

こくんと頷いて、セリンは大きく人型を歪ませた。

鉄も同じく転変すると、狼のような、銀の獣が顔をもたげた。

二人は、猗即(いそく)という妖魔で、日常においては、人間の姿で生活している。

妖魔の殆どは好んで人間の姿をとるのだ。

虫・爬虫類・魚類の一部を除いては、どの妖もそれだけは共通していた。

希少種の鉄とセリンは、兄妹でダルテの故郷の村に身を寄せていたが、皇帝軍が攻めてきた際、鉄達の命と引き替えに、ダルテは青国皇帝の下女として連れて行かれてしまった。

自分たちを、本当の兄妹のように慕ってくれたダルテ。

なんとしても助けたい、力になりたい。

二頭の大型の妖魔は、遁甲すると深闇の底の道を俊敏に駆けていった。

「昴……あたし、玻渓を止めなきゃいけない。手伝ってくれるかしら？」

庭で花を摘んでいたダルテは、その手を止めて、ひたと昴を見た。

「俺は……いつでも傍にいる、心配すんな」
昴は、やんわりとダルテの背を押すと、少し低めの切り株に座らせる。
「あんまり根つめるな？腹の子にもよくない」
そう言って、昴は眉尻を下げた。
「心配してくれるのは嬉しいけど、あたしだって……いざというときは、ちゃんと戦えるんだから」
不服そうに、頬を膨らませたダルテに、昴が笑いかけた瞬間、地面の下から固く緊迫した声が発せられた。
「多種属の妖が二頭、近づいて参りますっ、いかがなさいますか！？」
「種族はっ？」
鋭く聞く昴に、眷属はややしばらく戸惑ってから、やっとおずおずと言った。
「……猗即です」
「なに！？なんで猗即なんかがっ」
おろおろとし始めた昴は、ダルテを庇うように抱き締めた。
「す、昴……苦しいわ？どうしたの？」
「猗即がくるっ」
「え？」
首を傾げるダルテに、昴はしがみついて震えだした。
ダルテは、ぱちんと一つ瞠目をする。
猗即という名に、覚えがあったのだ。
「昴、あたしの話を聞いて？猗即、彼らは敵じゃないわ？なぜ向かってくるかは分からないけれど、あたしのよく知ってるヒトたちなの」
「なっ、なんで知ってるんだよ～っ」
まるで、子猫のようにぶるぶると震えながら尋ねる昴に、ダルテはにっこりと微笑んだ。
「それは、二人に直接聞くといいわ？」

どうっと、強い風が黄砂を巻き上げる。
風がすっかり止んで、顔を庇っていた腕を降ろすと、昴とダルテの前には、銀髪の少女と少年が佇んでいた。
「ダルテ！」
走ってきた少女と、ダルテはひとしきり抱き合って、再会を喜んだ。
「セリン！　元気だったのね、よかったぁっ」
「あたしだけじゃないわよぉ、ね？鉄っ」
「おう、元気そうで安心したぜ……一悶着あってから心配でな」
セリンの後ろから、ぬっと顔を出した鉄に、ダルテはにっこりと笑みを咲かせた。
「あたしも元気よ、彼が力を貸してくれたの」
ダルテは、ぎゅうっと昴を抱き締める。
ぽかんとしていた昴は、視線が集まって、一つ瞠目をした。
「この子を、助けてくれてありがとう、あたし…ダルテと同郷のセリンっていうの、こっちは兄の鉄。あなたは？」
新緑の瞳をしばたかせて、セリンは愛嬌たっぷりに、ひょくっと首を傾げた。
「す、昴」
「そっ、よろしくね～」
やや後じさった昴を気にしたふうもなく、切れ長の目元を和ませてセリンは笑う。
居心地悪そうに、昴は、するりと人型に戻った。
（よろしくっていわれても、なぁ？）
「ダルテ～……お前、なんか太ったんじゃねぇか？腹とか、出過ぎだろ」
からからと笑いつつ、ダルテをからかう鉄だが、一人だけ見解がずれている。
いち早く気づいたセリンは、一瞬にして赤面した。
「鉄ったら、もうおバカっ！」
セリンに背中を叩かれ、がしがしと頭を掻きながら毒づく鉄。

「ってーなァ、なんだよセリンっ」
「鉄らしいといえば、らしいわね。あたし……いま赤ちゃんがいるの」
くすくすと笑いながら、ダルテはまろやかな腹部をなで上げた。
「はぁっ！？　だ、誰のだ――――っっ、まさかあの男（皇帝）のじゃないだろうなっ」
あの男殺す！　と構える鉄を、ダルテは慌ててなだめた。
「ああ、違うのよ……あたしのダンナはこっち、昴なのよ」
「……ぼうず、昴だっけか？」
ずい、と身を乗り出した鉄に、昴は一瞬にして石化してしまった。
「あっ……ああ」
鋭い眼光に、昴はぎくしゃくと身じろぐ。
（睨むなよ～……寿命が縮む――――！）
「ありがとな」
「え？」
鉄の、鋭い眼光の強面が、柔和にほころぶ。
あまりのギャップに、昴はまたも瞠目した。
「ダルテを、救ってくれてありがと名……心から礼を言う」
「礼なんて、別にっ……俺は、自分のしたいようにしただけだ」
「ダルテを、頼むぞ」
そこで言葉をとぎらせて、鉄は鼻の頭に皺を寄せて、風の匂いを嗅いだ。
「殺気に、風が穢れている……早く、ダルテを連れて中へ入れ」
「あんたは？」
「俺は、ここで見張ってるさ、早く行け」
「わ、分かった、行こう、ダルテ」
昴が、ダルテの手を引いた瞬間。
それに一瞬遅れて、びんっ、と大気が震える音。
バッ、と鮮血が舞う。
腕を引かれたままのダルテが、宙を躍った。

昴は一瞬、なにが起きたのか理解できなかった。
ダルテの背中を貫く、一本の矢。大量の、赤い水たまり。
「ダルテ……ダルテ――――っ！？」
昴は、血まみれのダルテをそっと抱き起こす。
「バカ野郎が！　動かすンじゃねぇっ」
飛び出してきた月代は、自失している昴からダルテを取り上げると、刺さっている矢を握りしめる。
すると、矢は跡形もなく溶け失せた。
「大丈夫……中身は無事だ、だが失血がひどい。どうする、手段は一つ――――血を分ける。それで、同属になるしか方法はねぇ。人間を、やめることになる、それでもいいか？」
「お願いよ……お腹の子、助けて」
ダルテが頷いたのを見届けると、月代は、ダルテの傷口にそっと手首を宛てた。
傷口から、血を飲ませるのだ。
「月……代」
ぱたりと、ダルテの手が、力なく大地に墜ちる。
と同時に、ダルテを青白い光の膜が包み込んだ。
「ここを頼む、俺は……アイツを殺しに行く！」
月代は、セリンにダルテを託すと、崖の上に佇む玻渓を昂然と睨んだ。

ゆがんだ愛（後書き）

どうも、維月です。
更新が遅れてしまい、申し訳ありません。
ここまで読んでくださった読者様方には感謝感謝です。
次回、最終話（になる予定）です、乞うご期待ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1408a/

黄塵（こうじん）の大地　石青（せきせい）の空

2010年10月15日20時54分発行